福井県小学校長会

會報

2024年度
No.119

発行日：令和６年８月９日
発　行：福井県小学校長会
編　集：県小学校長会編集広報委員会
印刷所：株式会社宮本印刷

学び続ける校長に

福井県小学校長会
会長　氣　谷　達　郎

北陸新幹線の敦賀延伸により、県内各地の賑わいや県外との交流の進展が見込まれ、新しい福井県への期待が膨らんでいます。このような中、５月２日に鯖江市文化センターを会場に実施された学校運営研究大会を皮切りに、令和６年度の福井県小学校長会の活動が本格的に始まりました。

福井地震の翌年、昭和２４年に設立された福井県小学校長会は、昨年、全国連合小学校長会とともに発足７５年を迎えました。この７５年間、先輩方が福井県の小学校教育の充実と発展のために一致団結し、全国や東海・北陸地区の仲間と交流・協力しながら活動を進めてきました。現在の本県の教育力は、この伝統を土台にし、時代に即した新たな挑戦を続けてきた成果であり、本会の歩みは誇るべきものです。

しかしながら、昨今の子どもたちを取り巻く社会は目まぐるしく変化し、先行きが不透明で将来の予測が困難な時代となっています。加えて、GIGAスクール構想の推進、いじめ・不登校への対応、働き方改革の実現、自然災害への対策など、課題は依然として山積しています。教職員の処遇改善や若手教員の離職防止についても議論が進められており、まさに教育の改革期にあります。誰一人として取り残されないウェルビーイングな社会の実現に向けて、多様な人々と協働し、持続可能な社会の形成者として主体的に生きていく人材の育成が教育にも求められています。

子どもたちの将来の幸福のために、社会は、大人は、力を尽くさなければなりません。校長は、「自ら未来を拓き　ともに生きる豊かな社会を創る」子どもたちの育成を目指し、自らの使命を自覚し、志高く学び続け、活力ある学校づくり、信頼に応える学校づくりに努めなければなりません。

本会では、最終年度を迎える第３期福井県教育振興基本計画の基本理念である「一人一人の個性が輝く、ふくいの未来を担う人づくり」を目指して取り組んできました。引き続き、社会生活の基礎を身につける子どもたちが安心して笑顔で学校生活を送ることができるように、また先生方が安心して笑顔で子どもたちに接することができるように、私たち１８３名の会員がしっかりとつながり、リーダーシップを発揮しましょう。

さて、昔の話になりますが、私が新採用教諭として赴任した中学校で、校長先生から直筆の一枚の色紙をいただきました。その色紙には「知不足」の３文字が書かれていました。その先生から色紙について具体的なお話をいただくことはありませんでしたが、おそらく「礼記」の一節「学然後知不足　教然後知困（学びて然る後に足らざるを知る　教えて然る後に困しむを知る）」からの引用だと思います。教員になりたての若者に対して、教える立場にあるものこそ学ばなければならない、これからが勉強だということを、暗に教えてくださったのだと考え、折に触れて自戒の念も込めて思い出すようにしていました。

今、校長として、改めてこの言葉を思い出しています。校長であるからこそ、変化が速く予測困難な時代であるからこそ、学び続け、足らざるを知ることが大切だと感じています。今年８月には、県小学校長教育研究二州大会が開催されます。学び続ける校長として、全会員が敦賀の地に集い、発表者の先生方の提案をもとに学び、語り合いましょう。そして、１００周年に向けた新たな四半世紀の初年度も、「不易流行」の理念のもと、本県の子どもたちの未来につながる小学校教育のさらなる発展に努めてまいりましょう。

第76回小学校長学校運営研究大会 教育長祝辞

福井県教育長　豊北　欽一 氏

県内１８３校の校長先生方が参加され、第７６回福井県小学校長学校運営研究大会が開催されることを心よりお喜び申し上げます。また、小学校長会の皆様には、日頃から本県の教育力向上のためご尽力いただき、 厚く感謝申し上げます。

いくつか今年度の施策について申し上げます。

まず、校内サポートルーム支援員事業についてです。

不登校の児童生徒や不登校の兆しが見え始めた児童生徒を支援するため、教室とは別の居場所を校内に設ける「校内サポートルーム支援員事業」を昨年度小中５校で実施いたしましたが、今年度は５０校に拡充します。

校内サポートルームが、ただの居場所でなく、悩みや不安を持つ生徒が安心できる居場所となるよう、各学校で工夫していただきたいと思います。校内サポートルーム支援員の研修の場を設定し、定期的に情報交換をしていきますので、よろしくお願いします。

次に、小中学生次世代理系人材育成事業について申し上げます。これまで県では、理数グランプリや理数ゼミなどを通して、児童生徒の興味関心を高める取組みを行ってまいりました。

今年度は引き続き、小学生向けの「サイエンスショー」、中学生向けの「キャリア教育出前授業」に加え、小学校で理科の授業を担当している教員を対象に、「理科トレーニングセミナー(リカトレセミナー)」を、県内４会場で開催します。授業で使える実践的な講習を通して、実験や観察の工夫などを学び、児童の理科に対する興味関心を高める楽しい授業づくりにつなげてほしいと思っております。

また、令和５年度から福井大学と小学校をインターネットでつないで、遠隔でのプログラミング授業を実施しています。児童は、ゲームを作ることや図形を描くことを通して、プログラミングの楽しさや達成感を味わうとともに、複数校の児童同士が作品を発表し合えたことで、互いに刺激になったと聞いております。他校ともつながり、学べるこのような機会を活用しながら、プログラミング教育を推進していってほしいと思っております。

次に、ふるさと教育について申し上げます。

昨年度は、「ふるさと福井の魅力プレゼンテーション大会」で、大野市阪谷小学校がプレゼン大賞を、「ふるさと福井CMコンテスト」で大野市和泉小学校が最優秀賞を受賞しました。

審査員の方々からも、児童生徒のプレゼン力が年々向上しているとの評価を得ています。各学校において、児童が主体的に取り組み、自信をもって発信する力を付けていることを嬉しく思います。

次に、プレゼンの極意について申し上げます。

プレゼンテーションクリエイターの前田鎌利氏は、プレゼンテーションは相手を行動させるために行う。だから勇気と希望を持ってやってほしいと言っています。相手を動かすポイントは４つあって、1つ目は目的。ゴールを決めて何を勝ち取りたいのかを決める。２つ目は相手が何を求めているのか。情報収集し、相手の立場に立って仮説を立てる。３つ目は質疑応答。相手の質問にどう答えるかまで準備して初めてプレゼンの準備ができたことになる。相手が理解から納得へジャンプするのが質疑応答になる。ぜひ、小学生も自分たちの発表にどんな質疑応答が寄せられるのか、そこまで考えてほしいとのことでした。４つ目は「念(おも)い」。表面上のテクニックだけでなく、どんな「念(おも)い」を込めるかを大事にしてほしいと言っています。

次に、はぴりゅうスポーツ広場の活用について申し上げます。

デジタル技術で児童の運動意欲向上を図るため開発したシステム「はぴりゅうスポーツ広場」の運用が今年の春始まりました。

サイトでは、運動が苦手な児童にも楽しんでもらえるよう、目的別に４つのコースを用意し、挑戦可能な種目も約１００種類ありますので、ぜひ、子どもたちの運動するきっかけづくりに活用していただき、体力の向上を図っていただきたいと思います。

私は、５年前に教育長に就任した時、義務教育課の職員と意見交換しました。その時のメモが残っていましたのでご紹介します。

「いい授業」とは何か。それは、子どもたちが「わかった！」「できた！」という、達成感が得られる授業。子どもが「学ぶ内容が面白い」「学ぶ活動が面白い」と感じたり、「学んだことを活かせる喜び」を味わったりする授業。子どもたちの実態を把握するとともに、一人一人の考えや意見を尊重し、主体的・対話的で深い学びを意識したわかりやすい授業。

「いい先生」とはどんな先生なのか。それは、子どのたちの自主性や個性を尊重し、一人一人の存在価値を認めながら、学習指導や生活指導を行っている先生。子どもの話や意見をきちんと聞く先生。優しく、明るく、子どものことを一番に考える先生。見た目で判断しない先生。

「いい校長」とはどんな校長なのか。それは、教職員や家庭、地域から信頼され、子どもたちが通うのが楽しい学校づくりができる校長。行動力と判断力、実行力、責任感があり、誠実な人格を兼ね備えた校長でした。

さて、今年の２月に「信頼される校長の条件」といった竹内弘明氏の書籍が発行されましたので、少しご紹介します。

校長は、教職員を率いていかなければなりません。いかに教職員を動かすのか、教職員に動いてもらうのか。そこで校長と教職員をつなぐのが「信頼関係」です。信頼関係を構築するためには、まず、校長が教職員を信頼すること、そして信頼されるに足る校長の姿を見せることです。信頼関係の構築の基本は「話をすること」ですが、そのためには、丁寧に聞く、傾聴する姿勢が大切です。定期的な面談だけでなく、いつでも話をすることができるような環境づくり、例えばいつも校長室のドアを開けておくことに努めるなど、その敷居を低くすることができます。

また、学校には非常勤講師やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの非常勤の職員もいますので、ぜひ、こうした職員とも話をする機会をつくってみてください。なお、校長が言ってはいけない禁句は、「愚痴を言わない」「疲れたと言わない」「文句を言わない」の３つだと言います。

校長は学校の代表であります。自校のことは何でも知っている必要があります。学校のことを熟知するポイントは「学校を愛すること」だと言います。校長が学校に関わるすべてのものを愛おしく思うこと、そしてすべてに感謝の気持ちを持って取り組んでいくことが、学校の組織力を高めていくことにつながるのです。

危機管理は管理職にとって最も真価が問われるところです。危機管理の最善の方策は危機を起こさないことであり、予防対策の一つと役立つのが、いわゆるヒヤリハットの事例集です。少なくとも、校長は危機管理用のファイルやノートをつくり、ヒヤリハットを集約しておくことです。危機にどう対応するか、平時からのシミュ

レーションも大切にして、他校で何か事件が起こったときに、もしも自分の学校で起こったらどうするかと考えてみることです。

校長職は感動的な仕事でもあります。大変な職ですが、それ以上にやりがいも大きいものです。校長職を不安に思わず、大いに楽しんでほしいものです。自身の健康管理にはくれぐれも留意してください。校長の代わりはいますが、家族の中には、あなたの代わりはいないのです。

本研究大会が実り多い大会となりますよう、また、併せて、皆様のご活躍と、小学校長会のますますのご発展を心からご祈念申し上げまして、ご挨拶といたします。

令和６年度 福井県小学校長会
活動方針

福井県小学校長会は、昭和２４年の結成以来、長きにわたり本県の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を積み重ねるとともに教育諸条件の整備・充実に努め、多大な成果をあげてきた。

現代社会は、Society5.0の実現に向けて急速に変化している。また、グローバル化はさらに進み、少子高齢・人口減少社会を迎え、産業構造も大きく変わっていく。この変化の大きな時代の中で、誰一人取り残されないウェルビーイングの社会の実現が目指されている。

このような中、小学校教育には、正解のない課題に立ち向かい、自立した人間として多様な人々と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力の育成が求められている。本県においても「一人一人の個性が輝く、ふくいの未来を担う人づくり」の基本理念のもと、子どもたちの「夢と希望」「ふくい愛」を育む教育が推進されている。

学校は、持続可能な社会の担い手を育成するために、個別最適な学びと協働的な学びにより「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの力をバランスよく育む教育を実現し、新たな価値を創造し、社会を生き抜く力を身につけた子どもを育てていかなければならない。そのため校長には、明確なビジョンを掲げ、学校組織の活性化を図り、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善に努めることが求められている。また、ふるさとふくいの風土に根付いた教育文化のよいところを継承しつつ、「子ども自身の個性に気づかせ、伸ばしていく『引き出す教育』」や「知的好奇心や探究心を持って、学びを自ら進んで『楽しむ教育』」を、家庭や地域との連携・協働のもとで推進していかなければならない。

さらに、「ＧＩＧＡスクール構想」の推進、いじめ・不登校への対応、特別支援教育の充実、学校教育への信頼を一層高いものにするための教職員の資質・能力の向上、学校における働き方改革の実現など、対応すべき重要課題が山積している。「ポストコロナ」における学びの在り方の検討や、近年各地で頻繁に発生している地震や豪雨・豪雪等の自然災害への対策も求められる。また、教員が子どもと向き合う時間を確保し、質の高い教育活動を実現するために、少人数学級のより一層の推進や教科担任制の導入による持ち授業時数の縮減、教職員定数の改善や人的措置の充実も喫緊の課題となっている。

校長は、このような状況を深く認識し、教育改革の動向を的確に把握しながら、リーダーシップを発揮し、確かな計画と実行力を持って教育成果をあげていかなければならない。私たちは、組織の総力をあげて課題解決に努めるとともに、積極的に施策提言を進め、もって県民・国民の信頼に応える必要がある。そのために、校長は自らの使命を自覚し、志高く学び続け、権限と責任のもとに、未来社会を創造する力を身につけた日本人の育成を志向して、活力ある学校、信頼に応える学校づくりに努めなければならない。

以上の方針をふまえ、本年度は次の活動を重点的に推進する。

本年度の活動の重点

1　学校経営の充実
2　研究活動の充実
3　創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善
4　教職員の資質・能力の向上
5　教職員の定数や処遇の改善、働き方改革の推進

これらの活動を推進するために、東海・北陸地区及び全国連合小学校長会との連携を一層密にして組織活動の充実に努めるとともに、関係諸機関・団体とも連携し、小学校教育に対する正しい世論の喚起に努める。

主な委員会と活動事項

本年度の活動方針に基づき、本会の事業遂行のために次の専門委員会及び特別委員会を設置し、事業を推進する。

1　専門委員会

◇人事行財政対策委員会

義務教育費国庫負担制度の堅持、教職員の基礎定数及び加配定数の拡充、ICTを活用した教育の推進のための専門職員の配置促進、教科担任制の導入による教員の持ち時間数の削減、少人数学級の拡大を目指す学級編制基準見直しの促進、退職時の処遇の充実、働き方改革等のための対策・要請活動を行う。

◇調査研究委員会

今日的な学校教育の課題や学校経営上の諸問題について調査研究し、対策に資する。

◇教育研究委員会

研究主題を設定し、研究活動の推進及び教育研究大会の企画推進を行う。

◇編集広報委員会

「會報」の発行とホームページの更新により、情報の提供、成果の報告等を行う。

2　特別委員会

必要に応じて設置する。

令和６年度

専門委員会活動計画

人事行財政対策委員会

（要望活動・人対資料）

４月１９日	○第１回専門委員会 （第１回小学校人対委員会） 正・副委員長選出、活動方針・内容について協議等
４月末	○県教委と日程・話題等の連絡調整
５月	○第１回幹部会 ・当日の運営、参加者について
６月	○各郡市でアンケートを実施、課題・提案等について集約・分析
７月	○第１回小中合同人対委員会
８月	○第１回準備委員会 ・当日の運営および提言等の最終協議 ○第２回準備委員会 ・話題、提言等について
８月２９日	○「県教育長と語る会」
９月	○「県教育長と語る会」についての報告
１０月	○全連小人事対策研究協議会参加（委員長）
１月	○第２回小中合同人対委員会 ・全連小報告 ・次年度に向けての課題の協議

教育研究委員会

（研究推進）（全国大会・東陸大会）

４月１９日	○第１回専門委員会 正・副委員長選出、事業計画案作成 県、東陸・全国教育研究大会について
５月	○全連小・東陸愛知大会参加申込
６月１１日	○第２回専門委員会 県教育研究二州大会について 令和８年度東陸福井大会に向けて紀要作成準備
８月２０日	○県小学校長教育研究二州大会 福井型８分科会で郡市発表、研究協議
１０月１７日 ～１８日	○東陸愛知大会 １３分科会・全体会・シンポジウム
１０月２４日 ～２５日	○全連小徳島大会 １３分科会・全体会
１月	○第３回専門委員会 県教育研究二州大会の反省等 令和７年度各研究大会の概要 令和８年度東陸福井大会紀要作成準備

調査研究委員会

（実態調査・調査報告）（全連小調査）

４月１９日	○第１回専門委員会 正・副委員長選出、年間事業計画の作成調査テーマ、内容（項目）について
５月　上旬	○調査内容についての会員の希望調査 郡市ごとに希望調査、全体の集計
５月２２日	○第２回専門委員会 調査研究項目・内容の決定 調査方法・集計方法について
６月　上旬	○各郡市において調査の実施、集計
７月　中旬	○各郡市調査研究委員会 担当項目の考察作成
８月　下旬	調査結果の分析、考察検討 調査研究報告書の原稿作成
９月　上旬	原稿検討、調査結果分析、考察 （正・副委員長）
１０月	○全連小調査研究協議会参加（委員長）
１０月　下旬	○報告書のデータ配信（校長会ＨＰ） 県教委、地教委等へ報告書配付
１２月　上旬	○調査研究概要報告 各郡市調査研究委員が概要報告
１月　中旬	○本年度活動のまとめ（アンケート）

編集広報委員会

（會報発行・ＨＰ更新）

４月１９日	○第１回専門委員会 正副委員長選出、活動方針 各郡市原稿割当の確認・決定等 「會報」編集計画
５月上旬	○「會報」１１９号原稿依頼 県教委・校長講話執筆者・新任校長への依頼 ○ＨＰ更新①
７月　２日	○全連小広報担当者連絡協議会（委員長）
７月１１日	○一次校正締切
８月　１日	○第１回編集企画会議（正副委員長） 二次校正・編集作業
８月２２日	○第２回専門委員会 「會報」１２０号企画・原稿依頼計画 ○「會報」１１９号発行
９月　上旬	○「會報」１２０号原稿依頼 ○ＨＰ更新②
１１月１４日	○一次校正締切
１２月１２日	○第２回編集企画会議（正副委員長） 二次校正・編集作業
１月１６日	○第３回専門委員会 ○「會報」１２０号発行
２月	○ＨＰ更新③

校　長　講　話

震災記念日
昔、福井で大きな地震があった

〈福井市〉豊小学校長
宇野泰裕

皆さんは、福井市にフェニックスと名前の付いた場所が数多くあることを知っていますか？　フェニックスプラザ、フェニックス通りだけでなく夏を彩るフェニックス花火やフェニックスまつりなどの行事もあります。そもそもフェニックスって何でしょうか？　フェニックスとは中国の伝説で命が尽きるときに自分から火の中に飛び込み、新しく生まれ変わるという不死鳥伝説にまつわる鳥の名前です。では、なぜ福井市が不死鳥と関係があるのでしょうか。今日は、そんなことと関係のある「昔、福井に大きな地震があった」という話をしたいと思います。

１９４５年（昭和２０年）に戦争が終った３年後。ようやく平和が訪れ、人々の生活が元に戻りつつあった、１９４８年６月２８日、午後５時１４分に福井県丸岡を震源とする大きな地震が起こりました。当時は、震度６が最大震度でしたが、阪神・淡路大震災と変わらない揺れが福井を襲いました。亡くなった方が５千人以上、壊れた家が３万５千戸という大きな被害がありました。皆さんが通う豊小学校でも、当時の学校日誌にその被害状況が克明に残されています。南校舎は全部が倒壊、北校舎と講堂は半壊しましたが、校舎に子どもは残っていなかったため学校で命を落とした子はいませんでした。１週間後、町内各所に貼り出された紙で久しぶりに児童が登校し、夏休みを返上して校舎の後片付けが行われました。米軍から支給されたテントを張り、教室として授業を再開したのは８月、地震から１ヶ月半後のことでした。大人が被災した建物や道路の復旧にあたる中で子ども達は、自分たちが今できる勉強に頑張ったそうです。家に帰れば地震の後始末と苦しい生活が続く中、学校だけが心の拠り所だったのかもしれませんね。

その福井地震から７６年が過ぎ、その間も福井市は大雪や豪雨など自然災害に見見舞われてきました。しかし、その度にみんなで力を合わせて災害に強い、住みよいまち福井市を築いてきました。今年春、北陸新幹線が開業し、福井市は新たな発展を遂げようとしています。その裏側には、災害に負けまいと頑張り続けた人々の支えがあったことを忘れないでほしいものですね。今日はその震災記念日、午前１１時にはサイレンと共に犠牲者の冥福を祈り、災害への備えを誓い、皆さんで黙祷しましょう。

福井で地震にあったとき
豊小学校では…学校日誌から

・昭和23年（1948年）6月28日（月曜日）
午前　映画かんしょう会　国際劇場
午後1時より歯科医来校　1・3・5年けんしん

午後5時14分　福井市・森田・春江・金津一円にわたり烈震（立っていられないほどの大地震）
南校舎倒壊　北校舎・講堂半壊
↓
・7月　5日　町内張り紙で児童登校
・7月26日　アメリカ軍よりテント17張り到着
・8月　7日　6年テント資材の準備作業
・8月11日　1年ガラス拾い、3年椅子運び、5年テント張り、その後テントの仮教室で授業開始
・11月27日　第1校舎にて授業開始

令和６年度 学校生活レーススタート！

〈福井市〉春山小学校長
西行智美

例年より開花が少し遅かった桜。今、きれいですね。桜と言えば、私は３月３１日に「ふくい桜マラソン」を見に行きました。福井で初めて開催されるフルマラソン大会を、ぜひ見たいと思ったからです。大勢の人が走っていました。先頭集団には、タイムや順位を狙っている人。大会プロデューサーで、今年のパリオリンピックにマラソン日本代表として出場する大迫傑選手の走りは、さすがに軽やかでした。その後方には、仲間とおそろいの大会Ｔシャツを着て、楽しそうに走っている人、ピカチュウや孫悟空の衣装に身を包んだ人、北陸新幹線福井開業をＰＲしようとカニや恐竜のかぶりものをしている人などが続きました。また、「伴走」というゼッケンを付けている人がいました。５年生は分かりますね。誰の伴走？そう、目の不自由な人です。伴走ロープをしっかり握り、ランナーが転ばないよう、サポートしていました。何しろ、参加者はおよそ１万３千人。先頭集団が通り過ぎてから３０分以上経って、ようやく最後尾が見えてきました。そこには、走っているというよりは歩いている、私よりもっと高齢の人や、おなかに赤ちゃんがいる人などがいました。みんなそれぞれ。同じなのは「この大会に参加したい。」「最後まで走り抜きたい。」という気持ち。これが大切なんだと思いながら、最後のランナーが目の前を通り過ぎるまで応援しました。

春山っ子の皆さん、学校生活はマラソンレースに似ています。参加者は、今ここにいる、やる気に満ちた２７７名。今日はスタートの日です。途中、しんどい日もあるでしょう。でも、それを乗り越えると、ゴールでは大きな達成感を味わうことができます。まわりの人と同じスピードでなくていいです。自分のペースで前に進みましょう。

ただし、レースに参加する上で大切にしなければならない３つのことがあります。１つ目は、自分の考えをもつこと。力を発揮しなければいけない時はいつなのか、自分で考えて行動しましょう。２つ目は、思いやりの心をもつこと。ここにいるのは大切な仲間です。常に相手の立場になって考えましょう。３つ目は、心と体を鍛えること。簡単にあきらめない、そんな自分でいましょう。

それでは、新しい一年の始まりです。わくわくした気持ちでスタートしましょう。

二つのグラウンド

〈坂井市〉東十郷小学校長
岡　﨑　良　子

私が先月５月に見て、今も忘れられない二つのグラウンドの風景の話をします。

まずは、一つ目。先日の私たちの学校の運動会で、私が一番心に残ったのは、最終種目として、みんなで坂井音頭を踊っていた風景です。子どもも大人も全員が、にこにこ笑顔で楽しんだ素敵な時間でした。およそ６００人がグラウンドいっぱいに大きな大きな輪になって踊っている様子は「平和」「幸せ」という言葉がぴったりでした。

次に二つ目。同時に、もう一つ、ある学校のグラウンドのことを思い出していました。それは、５月の連休中、輪島市の知り合いを訪ねていった時に偶然に見かけたグラウンドの姿です。今年１月１日の能登半島地震により、その学校の校舎は避難所になっていました。そして、校舎隣のグラウンドにはアスファルトが敷かれ、たくさんの仮設住宅がびっしりと建ち並んでいたのです。運動会ができるようなグラウンドの面影は何一つ残っていませんでした。

さて、その日お会いした輪島市の知り合いの方は、まちづくりリーダーとしてこれからも活躍される立場の方です。その方は、静かに、こうおっしゃいました。

「岡﨑さん、今、輪島はどん底にある。だけど、これからどんどん変わっていく。必ずや、素晴らしいまちになっていく。だから、ずっと見ていてほしい。」

そう言われたものの、はて、私に何ができるのか、あれからずっと考えています。そして、決めました。

『東十郷小学校のみんなに私が見てきた地震の話をし、関心を持ってもらう。そして復興を応援する一人になってもらう。そんな風にして応援する人を増やしていく。』

今日の集会がその絶好のチャンスなので話をしました。

応援してもらうことが、励みになる・力になることを今年も運動会を通して皆さんは学びましたね。いつかあのグラウンドが元に戻り、当たり前に自分たちの学校のグラウンドで運動会ができるようになる日まで、一緒にお隣の石川県を応援していきましょう。

今から７６年前の６月２８日、福井地震がありました。当時の方々の努力とたくさんの方々の応援のおかげで、今の私たちの豊かなくらしがあることも忘れずに、この６月を過ごしていきましょう。

輝く心　～かたばみの花言葉～

〈小浜市〉雲浜小学校長
堂　前　裕　美

今日のかたばみ集会の話は、集会の名前が、なぜ「かたばみ」となっているのか、その秘密にせまりますよ。

ところで、「かたばみ」とは何か、知っていますか。実は、植物なのですよ。学校敷地内のいたる所で見ることができる、黄色やピンクのかわいらしい小さな花をつける植物です。見たことがある人も多いと思います。この植物をよく見ると、葉っぱの形がハート型です。このハート型は、校章に使われているのですが、どこがハート型かわかりますか。この校章を皆さんは毎日目にしています。朝、学校の校門を入ったとき、正面の校舎の壁が見えます。そこにハート型の葉っぱ、かたばみをあしらった大きな校章がありますね。実は、この校章は「剣かたばみ」という家紋の一つなのです。

「剣かたばみ」という紋は、小浜藩主であった酒井家の家紋でもあります。３年生の皆さんは、先日、総合的な学習の時間に神主さんからお話をお聞きしましたね。全校の皆さんにそのときの話をしてください。（３年生は酒井忠勝公について語る）その酒井家の家紋「剣かたばみ」の紋章と同じかたばみをあしらったものが、校章になっているのです。

かたばみは、クローバーとよく似ていますが、花や葉の形が違います。そして、花言葉も違います。かたばみの花言葉は「輝く心」です。

ところで、今から４５年前に今の学校が建てられ、引っ越しをしました。そのときに、先ほど話した校舎正面の壁には学校名しか計画されていませんでした。しかし、お城があった城内に雲浜小学校がやってきたことを喜んだ地域の方々が、その気持ちを何とか表す方法はないかと考えて、酒井のお殿様の家紋と同じ校章を取り付けることになったそうです。地域の方々の思いと誇りのこもった校章があの壁に掲げられているのです。

このように、小浜藩主の家紋「剣かたばみ」の校章は、雲浜小の子どもたちが、かたばみの花言葉のとおり、「一人一人が輝く心を持ち、何事にも真剣に取り組んでいる姿」を表しています。この校章にちなんで私たちの全校集会は「かたばみ集会」と呼んでいるのです。

ここまでのお話で、さらなる？（はてな）が出てきた人がいるかもしれませんね。たとえば、「かたばみの花言葉はなぜ輝く心なのか」。そこで、今日は、おまけの科学マジックをします。新たな？のヒントマジックです。よく見ていてくださいね。

（葉で10円玉を磨くと輝くことを実演）

昔、鏡を磨くのに使っていたともいうかたばみ。私たちもかたばみのように心を磨き、児童会テーマのように「一人一人が輝く」雲浜小をつくっていきましょう。

新任校長の言葉

‘はい’か‘ＹＥＳ’か

〈福井市〉足羽小学校長　髙嵜　真輔

「私の答えは‘はい’か‘ＹＥＳ’しかありません。」これは、私が教頭時代、校長から示されたいろいろな案に対して、答えた言葉です。決して、校長からの案だから‘いいえ’または‘ＮＯ’が言えなかったわけではありません。全てが「なるほど」「これなら」などと思える案だったからです。そして、それを基に教職員が一丸となって取り組み、大きな成果を上げてきました。その校長の下で、２年間、学校運営を中心にいろいろ教えていただき、学んできました。

そして、今年度４月、新採用校長として着任しました。着任した当初は、校長としてやっていけるのだろうかと不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、校長としての思いや考えを丁寧に説明することで、教職員も理解を示し、教育活動が進んでいっています。

このことから校長として大事なことは、教職員がやろうという気持ちになる案を示し説明すること、そして、案に対して教職員が動けるように準備することだと思います。そうすることで、教職員がチームとしてまとまり、学校がよりよい方向に進んでいくと思います。そのために、これから教職員が‘はい（ＹＥＳ)’と言って、共に歩んでいけるよう、校長としてリーダーシップを発揮していきたいと思います。

共に学び共に育つ学校づくりを目指して

〈福井市〉日之出小学校長　岩佐　直美

私は教頭時代、２人の校長先生の下で仕事をさせていただきました。お一人はコロナ渦ということもあり、次々と出てくる新しい課題に校長としてどう対応するか、常に危機管理能力と判断力・決断力が求められ、それをてきぱきとこなす姿に全幅の信頼を寄せていました。また、常に人の心に届く話の仕方には、いつも敬服していました。もうお一方は、ご自身も学び続ける管理職として、たくさんの刺激を与えてくださいました。どのように教職員の意識改革を行い、同僚性を育み、チーム力を高めるのか。どのように学校をつくっていくのか。一緒に学校づくりに取り組んでいく中で、学校経営で大切なことをたくさん学ばせていただきました。

さて、いよいよ自分が校長として学校経営に取り組む番です。私は、子どもたちにとっては安心・安全で楽しく学びがいのある学校、教職員にとってはやりがいのある学校、保護者や地域の方にとっては頼りがいのある学校づくりに取り組んでいきたいと考えています。変化の激しい時代の中で、子どもの主体的な学びを支援する伴走者として、子どもたちに寄り添い、一人一人の意欲や可能性、学びを最大限に引き出すために、教師も学び続けることが大切です。限られた時間の中で、教職員の対話を積み重ね、学び合う教職員集団をつくっていきたいと思っています。そのために、まずは、私自身が学び続けていきたいです。そして、子どもたちも教職員も、共に学び共に育つ学校づくりに全力で取り組んでいく覚悟です。

AI時代への対応

〈勝山市〉荒土小学校長　多田誠一郎

『新時代の学校組織において、校長には多様な役割が求められています。これからの「チームとしての学校」では、強い力で組織を統率・変革していくタイプのリーダーではなく、めざす学校像に向けて必要な人材、組織を適切にマネジメントできるタイプのリーダーが求められています。』

上記はAIに「小学校新任校長の抱負」と入力して３０秒ほどで出てきた文章を少し手直ししたものです。誰もが高性能のAIを無料で使える時代が到来しました。本校職員にも利用方法を紹介し、利用を推奨しています。

例えば「小学生に小数の割り算の方法を分かりやすく教える方法」と入力すると、それなりの応えが返ってきます。「小学校５年生理科ふりこのきまりの導入」と入力すると一般的な単元導入の授業構成がすぐに出てきます。

自分で考える能力が伸びないのではないか。懸念はありますが、このツールを使うことで、業務の効率化、働き方改革につながる可能性は十分にあると考えています。

しかし、AIは万能ではありません。子どもの心に寄り添い、伴走できるのは人間である教師だけです。どんな時代になろうとも、多様性を尊重し、幸せに向かって成長する子どもを支援する学校であり続けたいと思います。

地域に根ざした学校

〈あわら市〉細呂木小学校長　渡邉　朋重

教頭として赴任して２年目、創立１５１周年目を迎えた細呂木小学校の校長となりました。「細呂木地区創成会」や地域の手厚いご協力のもとで、史跡見学や農作業など様々な体験学習を行っている「地域に根ざした学校」です。先日、本校所蔵の「福井烈震画譜」について新聞社の取材を受けました。６年生が描いた被災の様子を三幅の掛軸に表装してあり、７６年前のものとは思えない色鮮やかさで、当時の思いを残そうという熱意が伝わってくる、本校の貴重な宝です。

Society5.0の実現へ向けて、社会が大きく変動している昨今、学校教育も変容が求められています。そう遠くない将来、人間の仕事の多くをＡＩが担うと言われ、求められる能力も大きく変わってきています。学校は、そうした変化に対応していくことが急務となっており、常にアップデートし続けることが必須となっています。音楽科教員としては、人間の感性に代わるものはないと信じています。そういう部分を大切にしながら、私自身も常にアップデートする意識をもちたいと思います。

地域の宝である子どもたち、学校を預かっている自覚をもち、地域とともにある学校文化の伝統を守りつつ、新たな時代を乗り越えていく「地域に根ざした学校」を目指して尽力していきたいと思います。

児童の笑顔を活力に

〈鯖江市〉河和田小学校長　若泉　馨

赴任してから三か月が過ぎました。校区の土地勘もあまりなく、先生方とも、ほとんど初対面のような状況で不安もありましたが、新学期初日の朝、校門前に立つと、子どもたちは初対面の私に元気に挨拶をしてくれました。この子どもたちの明るい挨拶と、生き生きとした笑顔が、私の毎日の活力の源になっています。「笑顔いっぱい、河和田っ子」が本校の目指す児童像です。

また、保護者や地域の方々との会話からは、本校に対する温かい思いと、児童数が減少している現状への危機感が感じられました。児童数の少なさは、一人一人へのきめ細やかな支援につなげ、自然豊かで伝統工芸の盛んな「ふるさと」の良さを学ぶことにより、将来、地域を担っていく子どもたちを育てていきたいと考えています。

本校は若い先生方も多く、活力があり、学校の原動力となっています。支援員・調理員・管理員さん等も含めて、一つのチームとして、働きやすい環境を作ることが、校長としての使命だと思います。

教職員と子どもたちが笑顔で過ごす場面をいかに多くしていくことができるか。学校では、いつでも笑顔とは限りません。時には大小様々なトラブルが起こりますが、それを解決して乗り越えていくことで、絆を深めていくことができるような学校を目指します。

みんなでつくる楽しい学校

〈美浜町〉美浜中央小学校長　川畑　成央

本校の教育目標は「あかるく　かしこく　たくましく～みんなでつくる楽しい学校～」です。この「みんな」とは、児童・教職員・保護者・地域の方など、学校に関わる全ての方を指します。

４月末、３、４年生が地域の河川漁業協同組合の方にお世話になり、あゆの稚魚を放流しました。５月、地域の農家の方にお世話になり、５年生が田植えを体験しました。６月１日には、たくさんの保護者・地域の方の大きな声援の中、体育大会を開催することができました。６月上旬、これまた地域の農家の方にお世話になり、１～４年生がさつまいもの苗を植えました。６年生は、ふるさと学習の一環で校区内の空き家について調査中ですが、これも地域の方にお世話になっています。毎月第３水曜日には、読み聞かせボランティアの方たちが、子どもたちに絵本などの読み聞かせをしてくださっています。

そんな地域のみなさんのあたたかいご支援・ご協力のもと、子どもたちは明るく元気に活動しています。教職員は、子どもたちの主体的な活動をねばり強く見守り、支援しています。校長として、このようなありがたい状況に甘えることなく、学校に関わる全てのみなさんの幸せのために、日々精進していきたいと考えています。みんなでつくる楽しい学校、ただいま進行中です。

自分の言葉で伝えたい

〈越前市〉北日野小学校長　和田　祥朗

校長として、子どもたちに、自分の言葉で思いを伝えたいと考えて、取り組んでいることを３点挙げます。

①全校集会でマイク片手に疾走

毎月テーマを掲げ、実物やプレゼン資料を提示して、『討論会』や『授業』を行っています。子どもたちと、できるだけたくさんのやりとりを行いたいと思い、マイク片手に列の間を走り回っています。

②校長室入り口横に掲示板を設置

校長室入り口横の壁に掲示板を設置しました。月２回のペースで貼り替えていきたいと考えています。６月は『人権週間』に合わせて『池田　伸』さんの『きみがいたばしょ』を掲示しました。みんな立ち止まって読んでくれました。

③校長室開店中

校長室の入り口はフルオープンにしています。「今いいですか？」の声をかけてくれれば、誰でもウエルカムです。「小さい頃から先生になりたかったのですか？」と聞かれれば、「将来について考えているのだな」と、こちらも真剣に対応します。「昨日の晩ご飯は？」と聞かれれば、少し盛って対応しています。

子どもたちに、『校長』の思いが少しでも伝わってくれたらなあと願い、真摯に取り組んでいます。

地域とともに

〈高浜町〉内浦小中学校長　安田　雅之

本校は、若狭富士と呼ばれる青葉山を間近に望み、眼下には内浦湾の青い海原が広がる風光明媚な環境にあり、京都府舞鶴市と接した福井県の最西端に位置しています。

小学生１８名、中学生１０名の、小中併設へき地校で、普段から中学生が小学生の面倒をよく見て、お互いに相手のことをよく理解した上で交流や活動ができています。こういう関わりが伝統的にしっかりと根付いているところが、本校の良さでもあり強みであると感じています。

今年度は、しばらく中断していた地域と合同での体育大会を再開しました。小学生と中学生が一緒に競技や応援をするだけでなく、地域の方々の競技参加や、準備から片付けまでの運営協力もあり、地域が一体となった大会となりました。この日を最後に２名の児童が転校をすることになっており、体育大会後に、全校でお別れの見送りをしましたが、地域の方々も一緒になって見送ってくださり、大きな家族のような温かさを感じました。

地域が学校との関わりを楽しみにしてくださり、学校も地域の協力に大きく支えられています。学校は地域とともにあり、地域に温かく見守られているのを感じます。

これからも、ふるさとを愛する子どもたちの育成に努めるとともに、学校が家庭や地域と一体となり、地域全体が幸せになるような役割を担っていきたいと思います。

編集後記

この度、「會報」119号を発行する運びとなりました。お忙しい中、貴重な原稿をお寄せいただき、深く感謝申し上げます。県小学校長会では、「會報」をはじめ、HPでも活動内容等を発信しております。令和６年度も「會報」やHPが、校長として職責を果たす一助となりましたら幸いです。